ここに天空の響きがある

柏酒孝鏡

平成二十年六月に制作されました仏教讃歌ハンドチャイムCD「蓮の花」を、バックミュージックに、お手元の資料について短い時間の中でお話を進めてまいります。

有難いことに今日も仏教讃歌CDを聴くという機会を得ていることができ嬉しい限りです。天の御加護、あるいは、宇宙の采配……と、いろいろな言い方が出来ると思いますが、メンバーが協力しあい頑張ったお陰でCDというひとつの形となって残せました。私達の回りには、ムダな物はありません。常に必要な学びを支えてくれる、ひとつひとつの出来事に、いつも感謝しながら時を重ねていきたいものです。

人と人との調和をはかるということは皆が励ましあい、支えあってつくりあげていくものです。ニューリーダーが、文字通り新しいリーダーとして、中心に立ち、同じ心をもって決意した一人ひとりが立ち上がり、真剣に祈り前進を加速していくならば、どんな壁も破ることが出来るだろうとの思いで取り組んでゆくわけです。この時におこる出来事は、すべての人に同じ感情を与える訳ではありません。私たちは、ちょっとずつの不都合を解決するために、皆がちょっとずつ無理をして、よりよい方向へ向かってゆきます。起きている出来事は全て必然なのです。必要なことが必要な時に起こるのだと思います。出来事の渦中では無我夢中でも振り返ってみると結果的には、それらを通して成長させられ豊になっていることに気づかされます。

私達はつねに神仏に護られているのです。只それに気づく人と気づきにくい人がいるでしょう。皆さん、今年あっ

た出来事を思い出してみてください。楽しかったこと、哀しかったこと、くやしかったこと、嬉しかったこと、色々な事が起こったはずです。笑ったり、悩んだり……。これらの出来事は自分の人生（心）の一ページとなって積み重ねられていきます。

さまざまな生き方がある中で、私達はいろいろな出合いを経験し、その中で栄養をいただき、努力すれば輝かしい未来が来ることを願って祈るわけです。まず、北極星の星に誓いをたてる前に、自分の足もとを、もっとしっかりと懐中電灯で照らし、わが目標に向かって、自身の仕事に取り組む姿勢を改めて見つめ直して、「ひたむきな心」を持って進みましょう。ややもすると、つい忘れてしまいがちなことですね。

これより、私達に起こった事柄についてお話しさせていただきます。

平成十七年の秋のことです。あるメモリアルホールの会場で弔辞の朗読中、バックミュージックとしてある音楽グループの曲がオルゴール・アレンジで流れておりました。それはとても心地よい柔らかな音色でした。葬儀中に音楽が流れることの違和感はまったく感じられず、かえって、この手段はすばらしいと思ったのでした。その音を耳にした瞬間……私はもし、これが仏教讃歌なら、そして……ハンドチャイムのことを思い浮かべたのでした。ハンドチャイムの心の底に深く、美しく優しい音質を奏でる音色は仏教讃歌にもっとも適し、絶対に宗教的な価値をみいだすことのできる楽器であるにちがいない。そして、思っただけでなく私は実行に踏み切りました。仏教讃歌の楽譜を見つけ、ハンドチャイム用に編曲し、それを奏でるメンバーを集め、よき指導者を捜してゆく。このように何か新しいことをスタートさせた時、私は自然と心躍りました。自分の考え、企画が実現してゆくのです。しかし、現実は苦難の道のりでした。しかし、やらなかった後悔や、あとでこうすればよかったと思うよりは、今おきている苦難は意味も原因もあるのだと気づき、苦難の本質は「情熱」「お知らせ」「あっ、ここだな」と気づかされ、そこには自由な仏の

教えがあるのだと感じさせられました。この「気がつく」ことこそ「生きるとは」という真実の答えにつながり、おのずから、そこには未来があることもわかってきました。

平成二十年六月CDとして完成し、世に送り出せホッといたしましたが、このひとつの形になるまでの苦労は一言では言い表すことが出来ない道のりでした。チャイマーは二年の間、入れ替わりもありましたが「CDを完成させる」という目標に向かって、皆が力を合わすことができました。力量も皆がちがいますので、お互いが思いあって練習に臨みました。

お互いを「信じること」それは、仏教讃歌の中に「蓮の花」として創られたこの曲を「和風天人」のメンバーが「一心に一節にハンドチャイムに打ち込んでいるうちに、いい音を出すには回りの人の心を感じなければいけないと思ってくる。」この時の「一心」これが「信」でした。よそ見をしない。かけ引きをしない。惜しまない。素直に、真面目に、真剣にハンドチャイムの練習に打ち込む。仲間への「気くばり」(指揮者への)、「目くばり」を大切にする。この信があれば自ずから道は拓け、宝の山の中にいる自分を見つけることができるのです。

蓮の花が一つだけでなく、多くの蓮の花がお互いを思いやって咲いている様子を浮かべ、意識し、すべての曲を演奏することができました。

古来より人間は、怒り、哀れみという心の姿を音楽や歌に込めて表現し、聴く人にその心を伝えました。こんなに素晴らしい「仏教讃歌」。最高の教えに相応しい心の祈りと安らかに生きる事を教えている見事な詞と曲であることを発見したのです。

仏教音楽に使用される楽器は、ある意味において限られているように感じます。仏教讃歌は、仏教音楽として歌うことは多くありますが、ハンドチャイムの音色だけでの演奏では、一体どのような形、曲想になるのか、唄の楽譜だけでなく、チャイムの癒される音色でいかに「音の調和」を作り上げてゆけばよいのか？　これはとても難しい事で

した。それには演奏する者の力量と全員の心をつなぎ、ひとつにまとめ上げる指揮者が一体となった時につくられますから、すばらしい産物が生まれてくるわけであります。そして、その時に演奏される仏教讃歌、いや、すべての音楽の曲は最高の仏の世界のレベルとなり、これこそ「天人が奏でる音楽」になるのではないでしょうか。そうです。チャイムの音色。「ここに天空の響きがある」そう私は感じました。

生かし合い、より大きな力を出していけるから苦難の時は一緒に悩み、励ましを送り、共に泣いて人生の幾山河を超えて、人間性の輝き温かな結合に真の同心が生まれることになってほしいものです。

十月に奇跡の生還をしたチリの鉱山落盤事故では、私達は「人の生命を掘りあてることが出来た」と報道されました。今の地球で忘れていることを教えてくれていました。人間の根幹になる素朴なことを教え伝えてくれています。それは、この事を毎日のテレビで一喜一憂しているが、地下の三十三人の生命よりも、地上にいる生命の方法がわからない。今は私達が失われていることがここにあると、忘れているものを地下の人が教えてくれました。何か光明を与えてくれた様に思えます。一致団結のカギの理由は待ち続ける家族の暖かい心によって支えられていたこと。現在の「無縁社会」とは、いったいどのように生まれて来たのか。仏の眼で見ることを知り得たと思います。

ニューリーダーの信仰心によって一日二回の祈りの時間を設け、強い団結心をとり、毎朝の祈りに「約束」したのです。互いに「心を一つにすることに結束していく」「仕事」「祈り」の七十日間の生活は、希望という高い強い精神力によって、地上でも同じ祈りが大救出作業を成し遂げることが出来たと報道されました。

そして、もっと驚いたことは救出用のカプセルが地下に届いた時、全員がチリの国歌を歌ったことでありました。上手に歌うとか、声を合わせて歌うとかいうことではなく、喜びに一斉に合唱した。「生きて地上に帰る」その願いが歓喜となって歌われたのです。仲間と力を合わせ、心を一つにして、自分達の思いや、心の叫びを歌に託して、聴

く人達に歌えることが大切なんだなぁ、ということがわかりました。きっと、この様子を見て涙した人は多かったはずです。

地上にもどってきた鉱夫は

「今は、あらためて日常を感じている」

「今は、空が、私達のために広がっています」

「今は、私が全く新しい人間に感じています」

歌うということは、人の心の奥底で燃やしている理念の表出として、心の中で想説役として、メロディーが喜びを増してくれたり、悲しくなった時には、気持ちを持ち上げて満足させてくれるものであり、反面、音はすぐに消えてしまうものであります。

この事故を教訓として「人間の生死の問題」が、今回の葬儀の問題点を結びつくして結びついた思いがあり、今活動していることは、「仏の教えとは」「ハンドチャイムの楽器と仏教讃歌と、そしてお寺とは」というように、いろいろとさらに「豊かな生活をどれだけ欲のままに求めていくのか」、日常の法則としての道を一般的ニュアンスとしてとらえてみる。このことを真正面から向き合うことについて、学び教えてくれた思いであることに気づきました。

わが寺には、もう一チーム本妙寺を拠点に、平均年齢八十歳を超えるハンドチャイム演奏集団「たちばな」があります。家内の指導で、はや八年が過ぎ、最高年齢は八十九歳。「百歳まで生きるつもりだから、それまでやるよ」と笑顔で話しています。妙見様の毎月のお経も、このパワーで続いていける様で安心。とにかく元気で明るいチーム。また、チャイムの練習の成果はボランティアで、老人福祉施設、ディサービス、特別養護老人ホーム等を中心に発表の会を持ち、訪問した聴衆から「元気をもらった」と激励を受けることもしばしばで、元気よく活動している様子に

感動と感謝を感じています。

メンバーは「会場で涙を流して感動してくれた人がいて、それを見てこちらも感動した。」「一人一人が責任を持って取り組んで支え合える。」「一緒になってやれることに生きがいを感じる。」「練習に行かなきゃと思うのが生きる気力になっている。」などと演奏から得られる一体感、達成感、充実感を身を持って感じています。

演奏した回数は八十回にも及び、楽しくをモットーに頑張っている姿に頭がさがる思いです。「あの人にも、この温かさをありがとう」といえる世の中であれば御苦労様。あなたは偉い……一人一人にそう言ってあげたい世界なのです。

ハンドチャイムは、振り下ろせば音が出る。という単純な操作で誰にでも手軽に扱えます。反面、一人では演奏ができません。お互いを気づかい思いやる心がなければ無理なのです。

人間関係が複雑になった現代社会の中で、いささか不相応とも思えますが、しかし、このような時代だからこそ、共存共栄を旨とするチャイムの演奏は、これから求められる人間関係の在り方について学ぶ上でも理想的で、むしろ相応しいといえるのではないでしょうか。

学びの手がかりは「苦難」の連続。自分の思い通りにならないことを、受け入れることも大切です。私自身、衣をつけない僧侶の活動は、衣に頼らなくても出来る重要な役割が結果的に良くなったような事もありました。衣がないのにもかかわらず笑いの人間関係が実感できました。

音楽による「曼荼羅の世界」を作りあげたいと思っています。まず腹を決める「世の中は厳しく苦しいのが普通で、あたりまえなのだ。」という腹をくくることが困難を乗り切るポイントに、さらに、第一に目的意識を強固にし、第二に私たちのチームの音色に磨きをかける。家族とのつながりを強くする。これって「人間なしの芸術は有り得な

い」と思ったりしますね。なんだか有難く思えて、気持ちがよくなってきました。

音楽の目標は、皆様に喜んで頂くことにあるわけでありますが、仏教讃歌という言葉は「祈り」だと思います。音楽の「楽しさ」と「厳しさ」と向き合う。宗教という音色の音楽に、一音一音に込める繊細な気配り、表現力、演奏者としての意識の持ち方と取り組み方を、共に協力して響かせる意味が「祈り」なのではないでしょうか。

私の見つけた宝物とは、ハンドチャイムという楽器です。人と人とをつなげるチャイムの音色で、人の心をつなげ、幸せを見つけたいですね。

メンバーが仲良く、楽しく、集まり弾ける環境を整え、いつでも練習が出来、練習の中で小さい成功を繰り返していく、報われるものを達成し、出合いという縁を創る努力を惜しんではならないことでありました。

CD制作にかけた二年間で実践して学んだことは、この心がけが先行することであり「良くなったから喜ぶのではなく、喜ぶから良くなり」「人は幸福に暮らしているから朗らかなのでなく、朗らかにしているから」幸福な事情が次々にあらわれて来るのだとおもいますが。

日蓮聖人の御遺文より「法華初心成佛抄」の中より、「一音」という御言葉があります。妙法蓮華経を唯一度、唱えたときの功徳を示した語であります。この意味は、「一度妙経と唱ふれば一切の佛、一切の衆生の心の中の佛性を唯一音に喚び顕わし奉る功徳は無量無辺なり」と述べられています。

「仏になりたい、なれないけれど仏になりたいという気持ちを、ずっと持ち続ける。」ことが仏の教えだと信じています。

このお言葉を、音楽が求める「音楽布教家」として私なりに置き換えて読んでみますと「よい音色を出せるようになりたい。」という気持ちをずっと持ち続けること。自由な心にならなくてはならないと思っています。老若男女が親しめて、魅力的な音色のハンドチャイムの伴奏による仏教讃歌が浄土の顕現のために、広く普及していってほしい

と願います。

この「ハンドチャイム」こそ、天空の音として再現された音色ではないでしょうか。天空より呼びかけている音だと思います。

只今第二弾仏教讃歌ＣＤ（仏教讃歌プラス抒情歌二十四曲）制作に向け、新メンバーが加入し「新生和風天人」として、夢の実現に猛練習中。このＣＤの中には、宮沢賢治の「雨ニモマケズ風ニモマケズ」の歌を手話つき歌入りで収録致します。乞うご期待下さい。

すべての音楽は、仏教音楽につながり、仏教音楽よりはじまったと言っても過言ではないでしょう。

最後に未来の方向性と、現状の具体策を見つめ直す好機が、いつも足下にあるのだということに、存続があることに、捉ぐえることから始めて行きたいと思います。

額縁より額なしの無限大の宇宙の広がりの仏教音楽。一音の音色にも広大な功徳があって、十界に遍く響いていくのだと思います。人生とは、「どれだけ息をするかでなく、どれだけ息を呑むような感動に出合えるか」でしょうね。

「愛される仏教讃歌」合掌。